

国語(古典)

▲文(日本文・中国文・史)・人間開発学部▼

【古典(古文・漢文)】

1

出典

紫式部『源氏物語』〈松風〉

解答

問一 イ

問二 (a)ーア (d)ーイ

問三 (b)ーイ (f)ーウ (h)ーウ

問四 エ

問五 ア

問六 オ

問七 イ

問八 エ

問九 (一)ーカ (三)ーア (四)ーウ

問十 (二)ーイ (五)ーウ (六)ーク (七)ーア (八)ーキ

問十一 エ

解説

問一 (1) (1)を含む「見馴れてまつはしたまへる心ざま」は若君の様子をいう。「る」は完了・存続の助動詞「り」の連

体形であり、「り」に接続する「たまふ」は四段動詞であるから、尊敬の補助動詞で、敬意の対象は「若君」である。

(2) 「たてまつら(たてまつる)」は謙讓の補助動詞。「片時見たてまつらではいかでか過ぐさむとすらむ」は入道の思いであり、見たいと思う対象は若君であるので、敬意の対象は「若君」である。

以上より、選択肢はイ、ウに絞られ、(3)と(4)は「御方」と決まるが、確認しておこう。

(3) 「はべり」は会話文中の丁寧語なので、聞き手への敬意となる。(3)を含む発言は、御方の和歌・発言を受けてのものなので、聞き手は「御方」として問題ない。

(4) 「たまへ」は、下二段活用であるので、謙讓の補助動詞であり、動作の対象に向けての敬意を示す。「思ひ」の対象は前の行の「君」であるが、「君」には「御方に同じ」という(注)が付いているので、敬意の対象は「御方」である。

(5) 「聞こしめす」は尊敬語であるので、主語を敬う。会話文中で尊敬語のみが使用されるときは主語が二人称主語になりやすいという点、私^レの命が尽きたとお聞きになっても、後の法要などをお考えになるな^レという内容から、主語は「御方」である。

問二 (a) 「行ふ」は^レ仏道修行・勤行する^レという意味の動詞であり、「います」は尊敬の補助動詞である。

(d) 「うしろめたなし」は^レ不安だ・気がかりだ^レという意味の形容詞である。語末の「なし」は程度が甚だしいことを表す接尾語であり、否定を表す言葉ではないので注意すること。

問三 (b) 傍線部直前では「若君」のかわいらしさが述べられており、傍線部の「きこえ」は謙讓語であることから、「放ち」の目的語は「若君」である。目的語を若君とした解釈として自然なものを選ぶ。

(f) 「錦」とは、美しい絹織物や美しいものたえを表すが、傍線部の「きこゆ」が謙讓語であることから「御方」の比喩であることがわかる。傍線部直後の「心の闇」の(注)からも、子を思う親の気持ちが読み取れる。

(h) 「さらぬ別れ」とは、避けることのできない死別を表す慣用表現である。傍線部末の「な」は禁止の終助詞である。

問四 傍線部(c)の御方の発言と逆接関係で、入道を主語として「かたがたにつけてえさるまじきよし……気色なり」とあり、ここはいろいろな事情からそうすることはできないと言いながらも、やはり道中がとても心配な様子だという意味である。よって、「えさるまじきよし」というのは、〈都への旅を助けるような行動ができないこと〉である。以上より、正解はエ。直前の歌の内容からイ、ウは不適。アは「見送ることさえ禁じられた」、オは「神仏に供物を捧げて祈ること」がそれぞれ不適。

問五 傍線部(e)の後の「思ひ放ち(思ひ放つ)」とは、きっぱりと思いきることである。「その方」とは、入道自身がよくぞきっぱりと思いきったことよと考えていることなので、「世を棄てつる」(傍線部(e)と同じ行)こと、つまり出家したことを指している。イは本文にない内容である。ウ、エ、オは入道がきっぱりと思いきる内容として不適である。

問六 傍線部(g)の直前の「若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしきに」が理由である。「宿世」とは、前世からの宿命、因縁を表す。その「宿世」のために、若君の将来が素晴らしいものになると期待するので、若君が田舎で過ごすのがもったいなく感じられるのである。

問七 「行くさき」とは、旅の行く先と若君の将来の両意である。それを「はるかに祈る」のは、上京しない入道である。「老の涙なりけり」は和歌(X)の直前「つつみあへず」に対応しており、詠み手も入道であることがわかる。

「たえ」はヤ行下二段活用の動詞「絶ゆ」の未然形であり、八行下二段活用の動詞「堪ふ」の未然形「たへ」との掛詞となっている。以上より、イが正解。

問八

「出でき」の「き」は過去の助動詞「き」の終止形で、二句切れとなっている。二句までは、かつて入道とともに都を出たことを表す。三句の「や」は疑問の係助詞であり、三句以降は、今回の旅は一人道に迷うかもしれないという不安な気持ちを表している。以上を踏まえたエが正解。

問九

(一) 形容動詞「うつくしげなり」の連用形の一部である。

(三) 「いみじさ」という体言に接続しているので、格助詞「に」である。

(四) 「知られにしを」の助詞「を」は連体形接続であり、「し」は過去の助動詞「き」の連体形である。「にき・にけり・にけむ・にたり」の形の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である可能性が高い。

問十

(二) 「しか」という活用形が存在する助動詞は過去の助動詞「き」しかない。

(五) 「てき・てけり・てけむ」の形の「て」は完了の助動詞「つ」の連用形である可能性が高い。

(六) 「じ」は打消推量や打消意志の助動詞である。

(七) 「ざら」という活用形が存在する助動詞は打消の助動詞「ず」しかない。

(八) 「けめ」という活用形が存在する助動詞は、過去推量の助動詞「けむ」しかない。

問十一

ア、一行目の「いみじう言忌すれど、誰も誰もいと忍びがたし」が対応している箇所だが、「言忌」とは、不吉な言動を避けることであり、「忍びがたし」というのは、涙をこらえきれないことであるので不適。イ、御方の気持ちについては「いきてまた……」の和歌を含む会話文にしか表れていない。そこに「入道の無念を晴らそうとしている」という気持ちは述べられていない。ウ、尼君の気持ちについては、和歌(Y)とその後二行にしか述べられていない。そこに「古受領の世話になることを苦々しく思っていた」という気持ちは述べられていない。エ、本文末の会話文「煙りともならむ夕まで、若君の御事をなむ、六時の勤めにもなほ心きたなくうちまぜはべりぬべき」が対応し

ている箇所である。「煙」とは火葬の煙であり、「心きたなく」は、本来勤行は極楽往生を願うものなのに、若君の現世での幸せを願うということを表している。「六時の勤め」の（注）も参考にすると、合致していると言える。オ、「尼君が亡くなったら」、「手厚く葬儀を行ってほしい」がいずれも不適。

2

出典

柳宗元『柳宗元集』

解答

問一 (X)ーイ (Y)ーエ (Z)ーエ
問二 イ

問三 エ

問四 ア

問五 イ

問六 ウ

問七 ア

解説

問一 (X) 「輒」は「すなはち」と読み、^シそのたびにいつも^シの意である。

(Y) 「愈」は「いよいよ」と読み、^シますます^シという意味である。

(Z) 「苟」は「いやしくも」と読み、^シもし^シという意味である。

問二 「持取」の部分ほどの選択肢も「物を背負う」という意味で共通しているので、「如故」の部分の解釈がポイントとなる。「如」には「もし」と読む副詞、「しく」と読む動詞、「ごとし」と読む助動詞、「ゆく」と読む動詞としての働きがある。傍線部(a)の直前で「苟能行」という仮定条件を受けているので、「もし」と読むのは不適である。

「しく」と読むのは、否定詞「不」で否定されているときである。「ゆく」と読む可能性は選択肢からありえないことがわかる。よって、ここでは「ごとし」と読む。背負っている物を一度取り去られているのに、さらに物を背負うのだから、「故」は「もと」と読んで、以前の意味が適している。

問三 今の世の人が財貨を積み上げ「己累」となることがわかっていないという部分の解釈である。財貨を積み上げようと続ける結果、傍線部(d)の直前に「近於危墜」とあるので、自分に「累が及ぶ（＝災いがふりかかる）」ことに気づかないのである。

問四 第一段落の「蝟蝮」と第二段落の今の世の人との重ね合わせがポイントである。傍線部(c)に対応しているのは傍線部(a)である。つまり、「蝟蝮」も今の世の人も一度倒れても、再び起き上がることができれば、以前と同じように行動するのである。「蝟蝮」は物を背負い、今の世の人は高位や財貨を求め続けるのである。傍線部(c)の直後の内容もヒントとなっている。

問五 「観^{ルモ}前之死亡^ヲ」の「モ」は逆接を表す接続助詞である。ということとは、普通は傍線部(d)を見れば、自らの戒めとするはずなのに、自らの戒めとすることを知らない。ここでは、財貨を求める自分の生き方を戒めるはずなのに、それができないのだから、イが正解である。

問六 傍線部(e)の前文の内容が「哀^{シム}」対象である。人は外見は大きいけれども、智慧は「蝟蝮」と同じであるということについて、哀れだなあと慨嘆しているのである。

問七 第一段落では倒れてもなお物を背負い続ける「蝟蝮」の姿を、第二段落では疲れたり、病になったり、罷免されたり、左遷されてもなお高位や財貨を求め続ける人間の姿が描かれている。そして、本文末尾で「哀れだなあ」と述べているのだから、人間のことを批判しているのである。